

最勝院

寺号 真言宗智山派 華林山慈恩寺最勝院

本尊 千手観音菩薩【木像桧立像】伝弘法大師作

脇仏 弘法大師木像【清涼殿即身仏の形容】

歓喜天 【唐金造り双身厨子入り】

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、新義真言宗、山城国醍醐三寶院末、慶安元年【一、四六八】寺領十五石の御朱印を賜ふ、相伝ふ往古は慈恩寺村慈恩寺観音堂の別当なりしが、永正元年【一、〇五四】齋尊といへる僧の住職せし頃、故ありて彼を辞して当所へ引き移れり、因つて華林山慈恩寺最勝

院と称すと云、されど此伝へ慈恩寺にては、沙汰せざることなれば疑ふべし、此僧慈恩寺の住職たることはさもあるべし、思うに彼が慈恩寺に在し、内別に一寺を当所へ建立し、山号・寺号共本寺の称号を襲ひ用ひ、其内寺号は本尊の通称たるをもてこれを憚り、其院号をもて常の称とせしものならん、さるにより始めは天台宗なりしが、中古今の宗に改む、中興開山を俊弘と云、延宝七年【一、六七九】示寂、墓所に石碑あり、此僧高德の聞こえありて、僧俗の信仰斜めならず、示寂後も諸人群詣すと云、其後法流の開祖俊慶と称す、正徳元年【一、七七一】十一月二十日示寂す、本尊千手観音、弘法大師の作と云、鐘楼元禄四年の鑄造の鐘をかく、寺宝繡御打敷二枚、慶安四年大猶院殿日光山へ御葬送の時、当寺御旅館となり、其節賜りしと云、御棺の上を覆ひし御品なれど、今は御打敷と唱えり、惣体鳥獸草花を織出し、幅は上の方三尺、下は広ごりて、九尺許あり。と記され

ている。

『武蔵国郡村誌』には、新義真言宗京都醍醐三寶院の末派なり、開山裔尊創建未詳。と記されている。

『寺の伝記』 「一」

第十二代の住職で、中興開山の俊弘は、京都の本山智積院の一老であったが、江戸幕府が二老の運徹僧正を本山の住職に任命したので、これは、古法に違背する旨を唱え、普山堂日智山の門を閉じたので、幕府に反対するものとみなされて、流罪を申し付けられたが、俊弘僧正の行徳高きを以て罪を赦され、僧正の出生地【大場村】の近くの最勝院の住職として帰院され、末寺の一属の教化に心を尽くされ寺の隆昌にあたられた。特に僧正は火防の法に長じ、いかなる火災も僧正の臨場によって消滅したと伝えられている。僧正は示寂に際し「われ不動明王となり火難を救わん」と、遺

言したとも伝えられている。現在は、最勝院境内に俊弘堂が建立されていて、毎月十二日に護摩供養が旭町々内会で行なわれている。

「二」

第三十六代鷲尾諦仁僧正は、明治三十六年、京都醍醐三寶院から、住職として、この寺に赴任されて、明治三十二年五月、放火により焼失した寺の復興に尽力されながら、「春日部重行公」の事跡を調査研究して、『春日部重行公事蹟』・『春日部重行公勲功記』・『春日部重行事蹟考』を作成して、顕彰運動を推進し、大正五年、忠臣孝子節婦の調査で、公の事蹟を宮内省に具申した。大正七年、この具申により従四位の位を受けた。また、僧正は漢字・語学に優れ、粕壁中学校【現春日部高等学校】の生徒を指導されていた。【註 鷲尾家は伯爵の公家であった】

「三」

『粕壁宿名主の公用日記』の中に、次の記録がある。

文化九年三月廿四日八ツ時過ぎ、最勝院焼失とあり、物置きより出火、本堂・庫裡位牌堂類焼と記されている。この時、門前の仁王門も焼失したものと推定される。

明治三十二年五月には、放火により本堂が焼失したが、この二件とも本尊は救出されていたことが記されている。

最勝院の沿革【寺の伝えによる故老からの話】

最勝院は、現在地に設置されたのは、平安時代と思考される。

最初は、この地に紀氏朝臣の子孫である、兵三武者紀氏實直【さねなお】の四男の左衛門尉【さえもんのじょう】實高【さねたか】が、在地名、春日部を名乗り春日部氏となった時、春日部氏の学問の師として迎えたのが、慈恩寺の別当裔尊僧正であった。初めは寺と言うより学問所の庵として設

置されたと推定される。後に慈恩寺から、弘法大師作の『千手観音菩薩像』を移され、ここに寺を開いたもので、寺号も本寺の名称『華林山最勝院慈恩寺』と唱えたが、本寺と紛らわしくなるので、院号と寺号を入れ替えて『華林山慈恩寺最勝院』と称したと伝えられている。

元は天台宗であったが、『玉藏院』の先々代の児島隆傳和尚より聞かせられたところによると、江戸時代になって、新義真言宗智山派の本寺が江戸に建立されて、江戸付近の主要な町に、学僧を派遣して『真言問答』を展開し、宗派の拡大の布教を始めて「問答」に負けた寺は、その場で転派させられた時代があり、粕壁宿内の主たる寺は、新義真言宗智山派に隷属したのだと言われている。最勝院は粕壁宿近在の寺院の本寺であったので、それぞれの末寺も本寺に倣って転派されたと聞かされている。

『寺の宝』 「一」

三代将軍、徳川家光より十五代将軍徳川慶喜まで、寺領十五石の御朱印状

「二」

春日部氏の建武二年の板碑【青石塔婆】

この板碑は、昭和初期には、本堂脇の古墳の上にあつたと伝えられているが、発見した時は二つに割れていたため、新町橋際の鋳かけ屋で周囲を銅版で補修したと伝えられている。その後、如何なる理由か東京に住む人の手に渡り、戦時中に新潟県の家【この家は伝えによると、澤庵禅師の生家と言う】に疎開し、後に新潟県立博物館が所蔵していたが、終戦により博物館が進駐軍の本部に転用されたので、伊藤家が引き取り後に北方博物館として開館し、保存されていたのを埼玉県立久喜高校の先生が発見して、

春日部市市史編纂室に連絡があり、当時の春日部市商工会長の故平井惣七氏が春日部氏の研究に熱心だったので、この旨を伝えたところ、平井氏は早速現地に調査に行かれて、碑の裏面に粕壁最上寺より出土と記入されているのを確認してこられ、その後、故山口宏春日部市初代市長【当時は埼玉県議会議員】と文化財委員長故日向熙先生と平井氏及び筆者【須賀】が北方博物館に赴き館長と面談して、子細を館長が了解され、青石塔婆は、新潟県には無縁のものであり、この板碑は郷里へ里帰りさせるのが良いということ、昭和五十二年に春日部市に返還され、現在は最勝院の本堂内に安置されている。

その他 「一」

境内の本堂西側に古墳がある。【春日部氏の墳墓で、この上から板碑が発見されている】毎年五月一日には、春日部市祖として重行公の慰霊祭が行

なわれている。

「二」

明治五年、学制発布により施行した粕壁学校が十月一日より、最勝院に設置された。

「三」

明治四十二年には、粕壁税務署が最勝院に設置された。

◎註 春日部氏については、現在資料の整理中なので、時期を見て『御名代部 春日部と春』

日部氏について』と題して発表する予定である。

宗門人別帳によるとこの寺の檀家数は【嘉永二年三月書上】粕壁宿の檀家

十一戸

玉藏院

寺号 真言宗智山派 八幡山神宮寺玉藏院

本尊 阿弥陀如来像 作者年代等不詳

脇仏 不動明王像 作者年代等不詳

虚空藏菩薩像 作者年代等不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、この寺の記載が全くない。

『武蔵国郡村誌』には、天保三年【一、八三二】開山傳榮示寂す。と云ふと記されている。

『寺の伝記』 「一」

寺の言い伝えによると、春日部重行公【延元元年六月三十日歿】の子孫で、春日部時房は豊臣秀吉の軍に攻められて、忍城に落ち延びて自刃す。時房に二児ありて、長男戊王丸、次男鶴若丸と言う。天正十八年【一、五九〇】豊臣方の武将に危うく殺されるところを最勝院の住職が幼子の為、寺で預かりし者にてとの命乞いによって助けられ、戊王丸は成長して、剃髪をし僧となり、名を尊雅と称し、慶長十二年【一、六〇七】に玉藏院の開山僧となったとつたえられている。

「二」

先々代の住職の児島隆傳僧正【昭和三十年示寂】から筆者【須賀】が直

接ご教授頂いた話によると、この寺の由来は、元は浜川戸地内の寺迹【てらじ：現在の八幡公園付近】と言うところに有った寺で創建は、延元元年【一、三三六】に春日部氏の館【やかた】の東側に春日部左近藏人【さこんくらんど】家繩公が曾祖父の春日部貞行公を弔う為に、僧俊榮に依頼して建立したもので、当時は浄土宗の寺であつたらしい、その後火災にあつてから一時期、最勝院に移転して、寺は継続していたが、前述のように宗派を改め、最勝院の末寺として、開山僧を尊雅とし、最勝院の東側に普門院と共に並んで本堂を建立したものであると言う。この寺の墓地は本堂とは別にあり、現在地に岸光坊と言う庵があつた場所である。昭和三十九年、この地に現在の玉藏院が移転して本堂が建立された。

『寺の宝』 「一」

正応三年【一、二九〇】の板碑【青石塔婆】：春日部貞行の供養塔と伝

えられている。

「二」

墓地内に、駒形橋の橋柱の供養塔がある。

その他

「一」

この寺の門前の道は、春中の校庭から内出耕地に流入していた、駒形堀があつた所【現在は道路や校庭となり：明治時代に開発行為により堀の付け替え等でその流路の跡も消滅してしまった。】駒形橋は寺の裏側の道路

【菖蒲街道】に掛けられていた橋

「二」

寺の真後ろにある道は、昔の岩槻古道の名残りである。

「三」

宗門人別帳によると檀家数【嘉永二年三月書上】但し粕壁宿の檀家五十八

戸

普門院

寺号 真言宗智山派 八幡山神宮寺普門院

本尊 阿弥陀如来像 【木彫】 作者年代等不詳

脇仏 弘法大師像 【木彫】 作者年代等不詳

興業大師像 【木彫】 作者年代等不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、この寺の記載は全くない。

『武蔵国郡村誌』には、最勝院末、嘉永五年【一、八五二】開山亮格示。寂とのみ記載されている。

『寺の伝記』

寺の言い伝えによると、春日部重行公【延元元年六月三十日歿】の子孫で、春日部時房は豊臣秀吉の軍に攻められて、忍城に落ち延びて自刃す。時房に二児ありて、長男戊王丸、次男鶴若丸と言う。天正十八年【一、五九〇】豊臣方の武将に危うく殺されるところを最勝院の住職が幼子の為、寺に預かりし者にてとの命乞いによって助けられ、鶴若丸は成長して、剃髪をし僧となり、名を承知を称し、慶長十二年【一、六〇七】に最勝院の前の街道を隔てた東側に一寺を創立し、普門院を開山したと伝えられている。

『寺の宝』

「一」

胎藏界曼陀羅 壺幅 年代不詳

「二」

金剛界曼陀羅 壺幅 年代不詳

「三」

十三仏如来像 壺幅 年代不詳

その他 「一」

この寺は最勝院の付属寺で粕壁宿の旅籠の檀家が多い。

「二」

宗門人別帳によると檀家数【嘉永二年三月書上】但し粕壁宿の檀家四十

四戸

成就院

寺号 真言宗智山派愛宕山大日寺成就院【昭和四十九年十一月十日阿弥陀寺とあるを改

称】

本尊 大日如来坐像 昭和四十九年十一月十日作成開眼

脇仏 阿弥陀如来坐像 有□上人作【天正十九年】

聖観音菩薩坐像 作者年代不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、愛宕山阿弥陀寺と称す。慶長年中【一、六〇〇頃】の僧順清といへるもの功あるにより、是を中興開山と称せり、阿

弥陀堂・太子堂を安ず。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、粕壁宿の西方字寺町にあり、新義真言宗粕壁宿最勝院の末派なり開山良寛、享保二年【一、七一二】示寂すと云。と記されている。

『寺の伝記』 「一」

寺の伝記によると、この寺の創建は、弘仁十一年【八二〇】眞斎僧正の開創によると伝えられている。その後宥□上人により、荒廃した寺を再建し、阿弥陀如来像を刻したと伝えられている。その後『風土記』に記載されている順清法印が寺に阿弥陀堂・不動堂・閻魔堂の諸堂を建立して寺を栄えしめたが、慶応二年【一、八六六】の火災により全焼して無住の寺となり、明治年間に八丁目の仲藏院より平原寛如師が、この寺に赴任して寺を再建して法塔を建立したと伝えられている。

先々代の平原寛如僧正から筆者【須賀】が教えられたこの寺の由緒によると、この寺

は本寺の、最勝院は春日部氏の菩提寺であり、また、末寺の管理・監督・
教導等の

任務があり、江戸時代までは、宗門人別制の寺務が行なわれていなかった
ので、江戸時

代になって、宗門人別制度が発足して、檀家の墓地を管理することになり、
粕壁宿内の

役人・有力者の葬送の儀式と埋葬の儀式を本寺の最勝院に代わって行ない、
檀家の宗門

人別帳を管理したと伝えられている。

「三」

この寺は、粕壁宿の宿役人【名主・年寄・組頭・問屋・帳付等】の墓地が多くある

のが特色である。その中でも特筆される墓がある。「見川喜藏」の墓である。

「四」

「見川喜藏の墓」

見川喜藏とは、天明年間に粕壁宿の名主で、天明三年【一、七八三】の浅間山の噴火

の災害と、天明六年【一七八六】の大洪水及び寛政三年【一、七九一】の大洪水の際、

粕壁宿の名主として、飢饉の救助や災害予防の土手を築いた功績により、

幕府より銀若

干を賜り、終身帶刀・子孫に至まで、苗字【見川】を名乗ることを許された。「喜藏」

は文化二年【一、八〇五】十月二十九日歿した。その墓が本堂裏の墓地の中央にあり、

その墓石の三面にその功績を称えた碑文が刻まれている。

故粕壁亭長喜藏墓表【碑文】

『翁諱知挙字喜藏姓見川氏武州埼玉郡粕壁駅人考諱貞昌姥関根氏世為亭長

翁天性至孝

生来色養不怠父母有病不難其左右丸薬餌必嘗而後進又善与人交終始一節

雖驛卒廝養亦

推誠過之於是人依帰愛慕敬如父母也

天明丙午關東大浸米價遽躍窮民艱食翁勸論鄉富豪使出貲穀而賑助焉

又諭儲穀者平價而売与之於一鄉貧民皆免飢歛之患粕壁之驛瀨刀弥川而市

川之西南新方

巖槻數鄉收入之定額凡二万石秋霖十日水溢襄陸田悉冲溪翁憂之大發鄉丁

壯私給資糧

而竹築堤凡數里

是後每秋完納而免速連欠責者實翁之力也 韋衆大喜稱其堤曰喜藏堤

事達於官府乃賜杯氏佩刀於士流又別賜白金若干餅加褒賞焉 官刻領行孝

義錄已載其人

而詳記其事

先是下毛州乙女邨人戶口【遂？】丘田委榛葵梟令与掾属相謀使翁開墾事

翁起鄉余夫菱荆棘而闢田圃鳩流民而勤稼口【稻？】不數年而復旧矣翁重

則嘯□急救

辨難解紛

貧惟恐不及是以一鄉服之鄉有爭訟事則翁自就其家懇說利害諄々教諭之為
矣 是以一鄉重之

嘗縣令掾

翁風貌魁偉聲如洪鐘性嗜酒飲至數斗不乱年六十余意氣蓬勃引滿勸客如少
壯人文化二年夏得病而寢其年十月二十九日沒享年六十七葬驛之愛湯山先
及近屬及近境父老無不借而悲者翁娶飯島氏生子二人男順匡今見亭長女綺

山氏余

嘗縣主簿熟翁為人順匡余銘其墓余弗辭為之銘

銘曰

勤孝千家 施惠千鄉 名戴青編 遠近誦芳 年家明賞

子孫承栄 懿哉斯翁 率衆以誠 刀祢之堤 功成不崩

民頼遺沢 永世不忘

文化六年歳 在巳己春三月 越後 舘 機 撰

卷 大任書

『碑文の解説』

故粕壁驛【うまや】の亭長【名主】喜藏翁墓表翁諱

【いみな】は、知挙、字喜藏、姓は見川氏、武州埼玉郡粕壁驛の人なり。

考【父】諱は貞昌、妣【母】は関根氏、世々亭長たり。翁天性至孝にして、生来色養

【孝養】怠らず父母に病有れば其左右を離れず、薬餌を丸めて必ず嘗【な】めて後進む。

又善く人と交わり終始節を一【いつ】にす。驛卒廝養【しよう】「使用人」

すと雖亦推誠

之に過ぐ。是に於て郷人依歸愛慕し、之を敬ふこと父母の如し。

天明丙午の歳、関東大浸【洪水】あり、米価遞躍【ていやく】：日々値上
がり【して窮

民食に難【くるし】む。翁、郷の富豪に勸諭して貲【し】を出さしめ、穀
を損【す】て、

これを賑助す。又儲【貯】穀の者に諭し平価にして之を一郷に売り与え貧
民皆飢饉の患

【わずらい】を免る。粕壁の驛は古刀祢川に瀕み【のぞみ】川の西南、新
方・岩槻数郷

の収入の定額は二万石なり、秋霖【しゅうりん】：秋の長雨【十日、水裏稜
【りりょう】

に溢れ田禾【てんか：稲】悉く【ことごとく】沖【水没】す。翁これを憂

ひ大いに郷の

丁壯を發し私【ひそか：個人として】に資糧を給して堤を築くこと数里、

是より後毎秋

完納して速に漣欠の責を免ること実に翁の力なり。

群衆大いに慶びその堤を称して喜藏堤という。事官府に達し乃【すなわ】

ち称氏佩刀

を賜ひ士流に列す。又別に白金【銀】若干餅を賜ひ褒賞に加ふ。官、頒行

孝義録を刻し

已に其人を戴せて詳らかに其事を記す。

是より先下毛州【しもつけのくに】乙女邨、人戸逐忘し、田榛莽【たし

んぼう：藪】

に委ね県令掾属【じょうぞく：代官と下役人】と相謀り翁をして開墾せしむ。翁起郷の

余夫に莽棘【ぼうしよく：草藪】して田圃を開き、流民を鳩【あつ】めて

稼穡【かしよ

く：農作】に勤め数年ならずして旧に復せり。

翁、義を重んじ財を軽んじて、口急【しゅうきゅう：急を救うために恵

むこと】救貧

惟及ばざるを恐る。是を以て一郷之に服す。郷に争訟の事有れば、則ち其

家に就きて懇

ろに利害を説き諄々として之を教諭す。而して家の難を排し紛を解けり。

是を以て一郷

を重ず。

翁、風貌魁偉、声洪鐘【こうしょう：大鈞鐘】の如く、性酒を嗜み【たしなみ】飲み

て数斗に至も乱れず、年六十余にして意気蓬勃として満を引き、客に勧むること少壮の

人の如し。文化二年夏病を得て寝み、其年十月二十九日歿す。享年録十七。

驛の愛湯山先塋【先祖来の墓】の側に葬る。県令掾属及び近郷の父老惜しみて悲しまざ

る者なし。翁、飯島氏を娶りて子二人を生む。男は順匡、亭長として見はる。

女は綺姐、杉山氏に嫁す。余嘗て県の主簿為り、翁の為人【ひととなり】

順生に熟す。

余、其墓に銘す、余辞せずして之が銘を為【つく】る。

銘に曰く、家に孝を勤め恵を郷に施す、名は青編【歴史書】に載き遠近
芳を誦す年明

賞に蒙【くら】く子孫栄を承く懿【うつく】しきかなこの翁衆を率ゆるに
誠を以てす。

刀禰【利根】の堤功成り崩れず民は沢に頼【あずか】り永世忘れざらん。

文化六年の歳己巳春三月

越後 館 機 撰

◎註 撰文者は、小出大助代官所御掛元メ館雄次郎である。

『寺の宝』

地藏菩薩像

聖徳太子像

天満天神神像

その他

江戸時代の有名な浮世絵師、豊国の四代目に宇田川豊国が粕壁宿から妻を迎えたが早

逝されたので、この人は、後に植村平兵衛の後妻となり粕壁宿で歿し、この寺に葬られた。

宗門人別帳による檀家数【嘉永二年三月書上】但し粕壁宿の檀家、百四十戸

妙樂院

寺号 真言宗智山派 月光山妙樂院

本尊 地藏菩薩立像 吉見誠山【明治二十年】作【妙樂院大火により焼失

後の作】

脇仏 不動明王立像 作者年代等不詳

阿弥陀如来坐像 作者年代等不詳

毘沙門天立像 作者年代等不詳

愛染明王座像 伝、鳥羽天皇御作【寺宝として安置】

◎註 脇仏は火災から救出して難を逃れた。

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、月光山と号す。本尊地藏を安ず、慶長十二年【一、六〇七】眞藏院と共に建立せり、其時の僧尊海を開山とす。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、粕壁宿の西方にあり、新義真言宗粕壁宿最勝院の末派なり、寛

永九年【一、六三二】開山尊海示寂すと云ふ。と記されている。

『寺の伝記』 「一」

寺の由来については詳らかではないが、この寺は最勝院の隠居寺として開基されたも

のと推定される。そのわけは、住職が最勝院の住職であった僧が、一時期妙樂院に住ま

い、暫くして又最勝院の住職に赴任されている僧が多くいることからも推定できる。

「二」

寺に残る文書【明治十九年の「粕壁戸長」の『妙樂院火災一件報告書』によると、次

のように記されている。明治十九年一月十九日、夜二時過ぎ、本堂入り口付近から出火

し、強風に煽られ付近の民家二十戸・七十棟を焼失した大火であった。

この寺の場所は、現在の新町橋の交差点の左側にあった。この寺の山門は新町橋に向

かつて建立されていた。墓地は現在地にあり、法印坊という墓守の庵があった。

妙樂院は、この大火によって焼失後に墓地のある現在地へ仮本堂を建てて移転した。

元の場所は寺の焼失後、明治二十一年に岩槻新道【旧十六号】が開通している。

「三」

この寺は、「成就院」が宿場の役人等の有力者の菩提寺であるのに対して、

宿場の大商

人や大地主等の菩提寺である。墓地内には、粕壁の商家や地主等有力者の

墓地が多くあ

る。又大きな商家では、ご主人の菩提は「成就院」で妻女は「妙樂院」と

言う家もある。

『寺の宝』 「一」

板碑 三基が保存されている。

嘉歴三年【一、三二八】

元弘二年【一、三三二】

元弘三年【一、三三三】

「二」

愛染明王像は、第七十四代の天皇で皇位を退位後、法皇となられた頃の

御作と伝えら

れており、【これを推定すると保安年間「一、一一二年頃」と思考される。】

尊像は、寺の貴重な仏像として本堂内に安置し、保存されている。

その他

特筆する檀家としては、斎藤家【丸八】鹿間家【油屋の屋号を持つ家】大里家等宗門人別帳による檀家数【嘉永二年三月書上】但し粕壁宿の檀家八十四戸

眞藏院

寺号 眞言宗智山派

成田山眞藏院

本尊 阿弥陀如来坐像 作者年代等不詳

脇仏 不動明王坐像 作者年代等不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、開山教順、正応三年【一、二九〇】三月廿日示寂、法流

開祖尊信、元禄十三年【一、七〇〇】四月廿五日遷化。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、粕壁宿の東方字大砂にあり、新義真言宗粕壁宿最勝院の末派なり、開基不詳。と記されている。

『寺の伝記』 「一」

『新編武蔵風土記稿』の粕壁の項に、「旧家者九左衛門」として記されて

いる事項の中

で、先祖に某郡関根村【現行田市内】を領し、即ち居城し在地名をもて関根を称すと云。

其後眞藏宗氏なる者、時の兵乱を避け当所に来たりて隠棲す、宗氏卒後其子、父が菩提

の為彼が墓所へ庵室を結びて眞藏庵と名付、其後願い上げて一寺とすと云。

今の眞藏院、

是なり。眞藏より数代を経、天正年中凶書と称せし者、北条氏に従ひ戦功によりて氏繁

より感状を賜ひ且つ鱗の紋を許さる。外に深井左枝へ円阿弥が奉りにて出せし文書及び

御入国の後、岩槻城主高力より与えし書あり。凶書をへて今の九左衛門に

及ぶ。と記さ

れている事項から推定して戦国期に眞藏庵として開基されていたことと、その由来を辿ることができる。

「二」

眞藏庵は現在の緑町【元新宿】スイミングスクール辺りにあったが、江戸時代になつ

て驛【うまや】の制度が定められ【◎註 江戸期以前の宿場は、この地にあった。】

粕壁宿が現在の市街地に置かれることになり、この地の者達も二・三男を残して、そ

れぞれが宿の中心地【現在の本町：新宿組：ロビンソン百貨店付近】に移

住して居を構

えたので、関根家も同様に転居して旅籠屋【仙台屋】を経営したので、居宅近くに八幡

神社を建立し、庵も近くに移築して、願い上げて一寺とし、名称を『砂石

山眞藏院』と

し、最勝院の尊信と言う僧を迎えて、末寺としたと伝えられている。

◎境内の本堂左側に特別に生垣で囲まれた墓地が関根家の菩提である。

「三」

この寺は、江戸時代から成田山信仰の講元として活躍していた寺である。

檀家は、百

姓と職人が多く大きな寺である。

その他

明治六年六月十四日に、粕壁学校の分校として眞藏院に日新学校を開設した。

宗門人別帳による檀家数【嘉永二年三月書上】但し粕壁宿の檀家百六十四戸

東陽寺

寺号 曹洞宗医王山東陽寺

本尊 薬師如来坐像 作者年代等不詳

脇仏 日光菩薩立像 作者年代等不詳

月光菩薩立像

作者年代等不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、禅宗曹洞派足立郡片柳村万年寺末、医王山と号す。古は大

寺なりしが、永禄年中焼失の後衰微せしを、寛永年間、熊巖といへる僧再建せり、因つ

て是を中興開山とす。同十九年十月示寂。

鐘楼万治元年鑄造の鐘を掛け、秋葉社、金毘羅社・観音堂。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、粕壁宿の東方字新々田にあり、曹洞宗足立郡片柳村万年寺の末

派なり。開基未詳。と記されている。

『寺の伝記』 「一」

寺に言伝えによると、この寺は文明年間【一、四七五】頃の創建で、現在
在の八幡公園

付近『新編武蔵風土記稿』の中に寺迹【てらじ】と称する字があった【で、

古文書にも、

東陽寺屋敷の文字が記されている。故老の伝えるところによると、この辺
りに行基菩薩

の作と伝えられる薬師如来像が忽然として出現し、靈驗あらたかで眼病を
始め種々の病

平癒祈願の参詣者が多かったという。文禄年中【一、五九六】頃焼失し衰
微して一時期

寺は消滅したが、寛永二年【一、六二五】足立郡片柳村の萬年寺の六世熊

巖和尚が現在

地に再興されて、開山僧となったという伝えが残されている。

◎註 伝えられる薬師如来像は、一時期東陽寺に安置されたが、付近に災

厄があり、住

民が薬師如来は、出現した場所にお返しするべきであるとして、今

の浜川戸薬師堂

に、お祠りしたと伝えられている。

「二」

この寺の檀家は、宿場の商家や下組以东の百姓と、学者や知識人の菩提寺である。

『寺の宝』

特になし

その他

「一」

境内に松尾芭蕉を記念する石碑がある。【筆者は推定ではあるが、埼玉地

方史研究に、

次のような論文を記した。

『松尾芭蕉とカスカベ』略記

芭蕉は、寛永二十一年【一、六四四】伊賀上野赤坂町に、松尾与左衛門
の二男として

生まれた。与左衛門の代に柘植から上野に移り、手習い師匠を家職として
いたという。

芭蕉は十歳の頃、藤堂家の侍大将良精に召されて、その嗣子良忠に近侍

した。良忠は、

芭蕉と同年輩で、俳諧を北村秀吟に学び俳号を蟬吟と称したが、芭蕉も主

君とともに俳

諧をたしなむようになった。

寛文六年【一、六六六】主君が死去したため、生家に戻った芭蕉は将来

を考えて、【当

時の二・三男は生涯、部屋住で生活する運命にあった。】生家を出て京都へ、

そして、京

都の五大山の一つである『建仁寺』に入門、禅・托鉢の修行と俳諧の勉強

をした。そし

て俳諧のメツカである江戸へ下り、水道工事の日雇人夫【アルバイト】を

しながら、俳

諧の勉強して模索を続け俳壇に頭角を顕し、当時流行した壇林の新風の先端を行くよう

になり、門人も多く隆盛であったが、たまたま付近からの火災により、小

石川の家を失

い、後日、門人の協力により深川に庵を構えて『芭蕉庵』とし、俳諧に精進した。

元禄二年、西行法師の全国巡脚の年祭を期して陸奥への旅と、心を奪われるようになり、三月の末に、実行にうつした。『おくのほそ道を読むと、三月二十七日【太陽暦の五月十六日】深川六軒堀の芭蕉庵を出て船に乗り千住で船を上がる【千住とは現在の千住大橋？】一番目の宿場に泊り、旅の手続きを【道中手形・出国手続き等】を済ませ、愈々千住を出発、奥羽長途の旅に立つ、「草加」の項に『其日漸く草加と云う宿にたどりつけり。』

とある。これは、草加宿に宿泊したのではなく、当時は千住から草加宿まで、途中で宿場はなく休息処もなく、日光街道の中で一番長丁場の区間であったところから、芭蕉は疲れて待ち遠しく思っていたところ、漸く草加宿に着いたことを記したものと考えられる。芭蕉に随行した弟子の曾良の日記によると、この日は、『カスカベ』に泊るとある。それでは曾良は何故か「カタカナ」で『カスカベ』と記したのであるか、筆者【須賀】は、次のように推測する。粕壁宿は昔から俳句の盛んな土地柄で、多くの俳人が出入りしているところで、当時有名な芭蕉が行脚の道すがら、粕壁宿に立ち寄ったので、宿内の有力者が出迎えて、もてなしをしたときに、曾良がこの土地の地名の文字を尋ねた際、ある人は「春日部」・「糟ヶ邊」・「糟壁」と云、またある人は、この度の元禄の御触れで「粕壁宿」となったと答え、三者三様の答えがあり、曾良は、日記に『カスカベ』と片仮名で記

したものと思われる。

それでは『カスカベ』の何処に宿泊したのであるか？推測の中では現在の一宮町にある『禅寺の東陽寺』ではないかと考えられる。何故なら代々の寺の住職の口伝もあり、さらに筆者は、芭蕉の経歴から見て、主君の死後、京都の五大山の一つ『建仁寺』に入門し、禅・托鉢の修行をし、また俳諧の所属が壇林とあり、壇林とは禅寺に多く、談林とはおのずと異なるものと思われるからで、芭蕉は、いわば禅宗の僧籍を持った人と考えられる。『おくのほそ道』紀行では、それ程多額な費用は持っていないのではな
いか？【おくのほそ道の記述の中に『瘦骨の肩にかかれる物先ず苦しむ。只身すがらにと出立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、ゆかた・雨具・墨筆のたぐひあるはさがりがたき餞などしるしたるは、さすが打ち捨てがたくて路地の煩いとなれるこそわりなけれ。とあり。】深川の庵を処分したり、多

少の餞別程度でこの長い旅路の費用は大変な負担になるので、最小限度の費用で旅をしたのではないかと想像されるから、【記述の中で、旅用としての最低限の着物・雨具・筆墨を持ち、しかし多くの人から贈られた餞別は重いけれど道中では、打ち捨て難く荷物になるがやむをえない。と記されているがさほどの金額ではないと推定する】旅籠は利用されず、旅先の禅寺や宿場の有力者の家に宿泊したのではないかと思う。

曾良の日記からもそのことが推定される。

「二」

墓地内に、江戸時代末期から明治初期に、粕壁宿にて手習いの師匠をしていた、鹿野寛定氏の石碑がある。碑文は継ぎのとおり。

慶応三年丁卯六月二鹿野氏文子卒其良人舊幕府外給使小原寛親先卒其子寛定有故隠干春日部文子亦来死於其手葬東陽寺寛定之在春日部也以儒教授

其地之子弟今茲明治十五年壬午十月門人諸子相議建立文子之墓 碑銘曰

嗚呼文也 其母其子 其名不空 今刻千石 傳榮無窮 門人等謹記とある。

◎註 地名について、碑文の中に「粕壁」ではなく「春日部」とあることに注目された

い。

その他

この寺が寺迹地内にあつた場所に、『眞海坊』という庵が嘉永二年の内牧村の火災で焼失するまであつた。付近を発掘すると、墓跡や青石塔婆【板碑】が出土する。

宗門人別帳による檀家数【嘉永二年三月書上】但し粕壁宿の檀家七十七戸

源 徳 寺

寺号 浄土真宗 大谷派慈光山源徳寺

本尊 阿弥陀如来木造立像 作者年代等不詳

脇仏 右 親鸞上人画像 開山当時本山京都本願寺より授与

左 蓮如上人画像 開山当時本山京都本願寺より授与

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、一向宗江戸浅草本願寺末、慈光山と号す
本尊阿弥陀、承応年中【一、六五二】了恩といへる僧建立せり、貞亨二年
正月示寂と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、粕壁宿南方字新々田にあり、京都本願寺の末派
なり、開基未詳。と記されている。

『寺の伝記』 「一」

明暦元年【一、六五五】了恩法師により開山

「二」

開山以前は、現在地に於いて説教所として布教に努めていたが、了恩法師により、祖師【親鸞上人】の御影、聖徳太子御影、寺号を明暦元年に願受、之により開基と称する。

「三」

歴代の住職は血脈相続【註 この宗派だけは妻帯が可能で代々の住職は世襲である。

『寺の宝』

安政六年【一、八五九】奥州棚倉藩の家老の娘が故あって、この地で手打ちになり、源徳寺に葬られた。その時、家老の家の宝物の『秋の七草』

の絵が奉納されたものが寺の宝として所蔵されている。

宗門人別帳による檀家数【嘉永二年三月書上】但し粕壁宿の檀家四十戸

崇蓮寺

寺号 浄土宗 普照山念仏院崇蓮寺

本尊 阿弥陀如来像 作者年代等不詳

脇仏 観音菩薩像 作者年代等不詳

勢至菩薩像 作者年代等不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、浄土宗岩槻浄国寺末、普照山念仏院と号す。伝へ云、昔粕壁宿の人、関根太兵衛といへるものの妻いかなる故にや当寺の前なる池中に溺死せり、太兵衛是を憐れみ菩提の為一庵を建立して蓮池庵と名付、其後願い上げて一寺とせしと、其年代定かならざれどかの妻、明暦二年七月九日死せしよしを云は、其頃の事なるべし法号普照院華屋蓮信女と称す。開山吟随。延宝六年二月七日晒寂。本尊阿弥陀。閻魔堂・庚申堂。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、粕壁宿の南方字内谷にあり、浄土宗埼玉郡加倉村浄国寺の末派なり、開山は忍吟随和尚元和二年九月二十二日晒寂す。相伝ふ開基寛山閑俗称太平なる者其妻嫉妬の心深くして当寺の池に投し蛇身となるを以て太平家を出て法躰となり、此寺を建立すと云ふ【風土記に開山吟随延宝六年二月七日晒寂すと云ふ。】と記されている。

『寺の伝記』 「一」

『風土記』・『郡村誌』に記されているとおりで、開山、本尊等は相違ない。

「二」

『赤堀池の伝説』

『風土記』・『郡村誌』の記事の中にも記述されているように、この寺の開基についてや寺の建立の生い立ちについての事項が伝えられている。

元新宿【現在の緑町】に關根太兵衛という者がいた。妻は、新川村の名主白石家から嫁に来たが、嫉妬の心深く蛇の靈に取り付かれ、毎夜崇蓮寺池【当時は昔の水害によって出来た押堀：オツポリで池の名前はなかった】に身を沈めていた。太兵衛は、毎夜濡れ髪を乾かす妻の様子に不信を抱いたが、ある夜家を抜け出した妻の後を追うと、妻の姿は崇蓮寺池の前で消

えてしまった。彼は戻って妻の部屋を伺っていると、やがて帰って来た妻は濡れた髪を乾かし始めた。彼は思わず「正体見届けたぞ」と叫んだ。この声を聞くと、妻は家を飛び出した。彼は後を追った。池の側まで来た、妻は蛇体と変わり池の中に消えた。池は忽ち赤色に変わった。それからは、この池を「赤堀池」とも言うようになった。

また、崇蓮寺が建立されてからは、土地の人達は「崇蓮寺の池」と呼ぶようになった。この池には付近に雑木林があつて、昼なお暗い池であつた。現在は埋め立てられて『春日部市コミュニティセンター兼春日部市南公民館』が開設された。庭内に小さな池を擬して、その伝説を伝えている。

「三」

境内には、閻魔堂がある。市内では、当寺と銚子口の西藏院脇の集会所に閻魔像が安置されている。

『寺の宝』

本堂内に庚申像とその版本【両方共一ノ割の圓福寺の第九世光世上人の御自作】境内地に青面金剛・帝釈天等の庚申塔が十一基

その他

「一」

池にまつわる伝説があるので、毎年八月十八日には、歴代住職により、池の供養を厳修している。

「二」

この寺には、粕壁町時代から、昭和三十五年頃まで、鉄道の轢死者や山林の縊死者河川の溺死者等で、身元不明の者の埋葬指定の墓地が存在していた。

宗門人別帳による檀家数【嘉永二年三月書上】但し粕壁宿の檀家二十二戸

粕壁宿の寺の概要

粕壁地区には、近・現代になって創建された寺があるが、ここでは省略する。

この地区には、江戸時代に存在していたが、明治初期に廃仏毀釈令の措置により、無檀・無住のつぎの寺院は、廃止された。

「正藏院」

『新編武蔵風土記稿』には、最勝院門徒天満山と号す。慶長二年秀海と云う僧建立せり、本尊地蔵を安ず。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、粕壁宿の西方寺町にあり。と記されている。

「華藏院」

『新編武蔵風土記稿』には、一乗山と号す。是も慶長十二年「正藏院」と同じく建立せり、其時の僧を幸存と云、大日を安ず。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、記載はない。

「仙乗院」

『新編武蔵風土記稿』には、本山修験葛飾郡幸手不動院配下、開山長実、寛永五年二月寂本尊不動。当寺はもと梅田村にありしを、第二世長雅の時、寛永九年当所【春日部八幡神社】へ引き移せりと云、天国の刀一振りをお蔵す。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、記載はない。